

や ま が ら

『林業経済』誌を購読するようになってから33年になる。同様に、林業経済学会と日本森林学会の会員になってからも33年である。学術の世界に身を置き、自らの研究や学生の研究指導に精を出してきたが、ふと振り返る時に、学生時代の恩師の姿や恩師の私への対応が、今の私の根底にあるように感じてならない。

学部時代の恩師は、10冊以上の専門書を上梓しており、昼食や夕食を時々ご一緒した際に著書や論文の執筆をどう進めているかを楽しそうに話され、同じ学術分野で活躍される方々との議論や交流の様子も紹介してくださった。私の卒業研究に対しては、ゼミ発表の際などに一言二言のコメントをされるだけで、基本的には自由にやらせてくださった。

修士課程では、恩師は「ゼミ生は2名」と決めておられて、私が初めて訪問した際には「受け入れられない」と断られた。それでも、私は恩師の専門性から研究指導していただきたかったため、自分なりに勉強したことをレジュメにして毎週提出し、2か月ほど続いた頃に3番目のゼミ生として特別に受け入れてくださった。そのゼミは大変厳しいもので、環境経済学や資源経済学に関する英語論文を主に毎週2～3本読んで発表することから始まった。計量経済学や厚生経済学の理論を習得できていなかった私は、ゼミでは恥ずかしい思いを何度もし、ゼミが終わってからは図書館に籠って4～5時間の復習をする日々だった。それでも、どうにか同期についていって修士論文を書き上げた際には、恩師のご自宅に呼ばれて半日あまりをかけて、私の修論草稿と一緒に添削してくださった。今、その朱書きはバイブルとして私のそばに置いてある。

博士課程に進学するに当たっては、数人の研究者から様々なご助言を頂戴し、有り難いご縁

をいただいて恩師に研究指導していただけることになった。最初のゼミで博士論文の目次案を発表したところ、恩師から「それは君のライフワークで取り組めばよく、博士論文ではもっとテーマを絞って取り組みなさい」と指導を受けた。これまで行ってきた私の研究活動は、まさにライフワークとして当初の1つ1つの研究課題に取り組んできた結果なのだとも思う。恩師は、論文指導ゼミとは別に、米国の大学院で教科書として用いられている計量経済学やミクロ経済学を読む機会を設けてくださった。概ね5～6名で輪読したが、私たちが理解できない箇所を、恩師が板書しながら丁寧に解説してくださった。このことが、私（たち）の研究にお

ける礎となっていることは言うまでもない。博士課程の恩師も、私が博士論文草稿を書き上げた後に、教授

室に私を呼んで丸1日の時間を割いて添削してくださった。この朱書きも、私にとってはバイブルであり、すぐそばに置き、日ごろの学生指導のお手本としている。

林業経済学会に所属する若手・中堅から、「自ら寄って立つ理論が身に付いていない」という心配の声を聞くことがあるが、それは大学教員の対応の仕方によるところも少なくないように思う。例えばミクロ経済学でもマルクス経済学でも、学生たちに基礎を身に付けてもらう機会を持つことが大事なのではないだろうか。それに学生の自主ゼミが加わると強固になる。また、学生の自主性に任せて研究を行わせるというのも1つのやり方であるが、ゼミでその時々目標を設定し、研究の進捗を管理するマイルストーンの設定も大事になっているのではないだろうか。これも博士課程の恩師から私が引き継いでいる学生指導の一面である。

(森の奏)

温故知新